

教育・人づくり部会提言書素案

【政策指標 1】 将来の夢や目標を持っている児童生徒の割合

背景		提言		委員発言箇所
背景 1	小学生と比較して中学生になると夢や目標を持つ生徒の割合が低下し、「当てはまらない」「どちらか」というと当てはまらない」と回答する層が本県では小学生の11.4%に対して中学生では24.8%へと増加するなど、将来像を思い描くことに難しさや迷いを感じている生徒が約4分の1にのぼっている。	提言 1 - 1	一般的な職業体験にとどまらず、各種「学会」や「協会」が保有する独自の教育プログラムをキャリア教育の一環として積極的に取り入れることで、既存の職業観のみでは将来を描きにくい生徒に対し、幅広い分野の知見に触れる機会を創出し、新たな目標や選択肢へと繋がる気付きを促す必要がある。	第2回部会_長谷川委員の発言
		提言 1 - 2	複業に取り組む人や起業家など、地域で多様な働き方を実践する大人を身近なロールモデルとして紹介し、多様な生き方から直接学ぶ機会を創出することで、児童生徒が社会との繋がりの中で具体的な将来像を描けるように導くことが重要である。	第2回部会_高橋委員
		提言 1 - 3	「将来の夢や目標を持っている」との問いに「当てはまらない」と回答する児童生徒に対し、見通しを持てない不安やプレッシャーに丁寧に寄り添いながら、個別の状況に応じた面談やサポートを行い、将来への焦りからくる学習意欲の喪失やドロップアウトを未然に防ぐきめ細かな支援体制を強化する必要がある。	第2回部会_高橋委員 第2回部会_長谷川委員

【政策指標 1】 将来の夢や目標を持っている児童生徒の割合

背景		提言		委員発言箇所
背景 2	進路選択が「どのような職業に就くか」という視点に偏りがちで、自分が「どう生きたいか、どんな人間になりたいか」という本質的な問いに向き合う機会が不足している。	提言 2-1	これ以上の活動や課題を単に上乘せするのではなく、既存の学習活動や業務の中から「何をやらないか」を明確に決断することで、受験勉強等に追われるこどもたちと多忙な教員の双方に時間的・心理的な「余白」を創出し、こどもたちが主体的に自らの「生き方」に向き合い、教員がそれにじっくりと伴走支援できる環境を確保する必要がある。	第2回部会_寺野専門委員
		提言 2-2	「秋田わか杉『キャリアノート』」については、これを単なる職業選択の手段ではなく「自分がどう生きたいか」という生き方の軸を育むものとして捉え、「途中で目標が変わっても良い」というメッセージで児童生徒に精神的なゆとりを与えながら、一人ひとりが自身の生き方と将来の目標を柔軟に結びつけられるよう支援するツールとして活用することが必要である。	第2回部会_高橋委員 第2回部会_長谷川委員

【政策指標 2】 認知したいじめの解消率

背景		提言		委員発言箇所
背景 1	複雑化するいじめ問題への対応と教職員の負担軽減に向けて専門職の活用が進む中、守秘義務への配慮と担任等への情報共有との線引きが難しく、専門家の知見が学級経営に十分に活かしきれていないケースも見受けられる。	提言 1	スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと連携する際、守秘義務に配慮しつつも、こどもへの適切な支援に必要な情報共有の基準を設ける等により、専門職から得られた知見を担任等へ効果的にフィードバックし、学校の組織的な対応力を強化する必要がある。	第1回部会_和田委員、長谷川委員
背景 2	いじめ問題の背景には、当事者間だけの関係性にとどまらず、周囲の傍観や同調を生み出してしまう学級全体の空気感や風土等に関する課題も存在している。	提言 2 - 1	生徒指導等に関する研修会を指導主事からの伝達や有識者の講義のみで終わらせるのではなく、教員同士が具体的な事例や互いの実践を持ち寄り、「学級風土づくり」について協議を深める場へと転換し、その内容を一層充実させる必要がある。	第2回部会_和田委員
		提言 2 - 2	教員自身が研修等の場で対話を重ねて学び合う経験を活かし、日頃の学級経営の中にもこども同士が互いの思いや考えを安心して共有できる場を意図的に創出することで、いじめが起これにくい温かい空気感を学級内に醸成していくことが重要である。	第2回部会_和田委員
背景 3	いじめが「解消」と判断された後も、こどもたちの心に不安や葛藤が残る実態がある一方で、事案の終結とともにその後の支援が途切れがちになる点が懸念されている。	提言 3	いじめの解消をもって対応を一区切りとするのではなく、再発防止の観点から、アンケートや定期的な面談等を活用して当事者が真に安心できているかを組織的に確認するなど、継続的な見守りと心のケアを行う体制を強化することが重要である。	第2回部会_和田委員

【政策指標 2】 認知したいじめの解消率

背景		提言		委員発言箇所
背景 4	「認知したいじめの解消率100%」という数値目標を設定することで、学校現場が数字の達成を目的化し、表面的な解決を急いでしまう懸念がある。	提言 4 - 1	いじめの解消率について、単なる数値の達成を目的とするのではなく、全てのこどもたちがためらうことなくSOSを出せる環境と安心できる「居場所」が校内にある状態こそを、本来目指すべき姿として共有することが重要である。	第2回部会_和田委員
		提言 4 - 2	目標達成への焦りから事案が過小評価され、いじめが認知されないまま水面下で深刻化することで、認知後の解消に時間を要するといった事態を回避するため、周囲の大人の目による早期発見を徹底し、いじめが疑われる事象や兆しが見受けられた際の初動対応を確実かつ丁寧に行うための体制を構築する必要がある。	第2回部会_和田委員
		提言 4 - 3	表面的な解決を急ぎ拙速な対応に陥ることを防ぐため、管理職や生徒指導担当、スクールカウンセラー等が連携して支え合う形を対応を基本とし、複数の視点からいじめの根本的な改善にあたることが重要である。	第2回部会_和田委員

その他の提言

不登校や多様な学びの場におけるこどもの実態把握と支援体制について	不登校児童生徒やフリースクール等の多様な学びの場にいるこどもたちを対象とした独自の実態・意識調査を実施するなど、全国調査等の枠組みから外れがちな層のデータを明確に可視化した上で、全てのこどもたちの心に寄り添うきめ細かで効果的な支援体制について検討する必要がある。	第2回部会_高橋委員、寺野専門委員、和田委員
----------------------------------	---	------------------------